花供養と京都の芭蕉

京都俳諧研究会　竹内千代子　松本　節子
岸本　悠子　小林　孔

要旨

本稿は、京都東山の芭蕉を祀るために高桑闌更が建てた芭蕉堂において催される花供養会と、その折の献句などを集めた年刊句集『花供養』、京都における芭蕉顕彰の史的意義を研究したものである。次にそれぞれのテーマから考察する。

1　「京都の“芭蕉さん”―花供養会と芭蕉句碑―」　竹内千代子
“京都の芭蕉さん”と言えば、芭蕉堂・花供養が有名である。芭蕉句碑も観光地に建てられることが多く、親しまれている。これらは義仲寺の時雨会と芭蕉墓を先例とするが、京都独自に展開していく様相を考察する。

2　「花供養と京都俳壇」　松本　節子
天明６年に、闌更が芭蕉堂主として活動を始めた時、京都の点者･俳諧巧者は、43人と考えられ、そのうちの数人以外の人々とは没交渉であった。それは俳諧に対する理念、対象とする人たち、俳諧の広め方の違いでもあった。

3　「花供養の書肆　勝田善助」　岸本　悠子
享和３年から文化９年ごろまで『花供養』の出版に携わった書肆である勝田善助について、書肆と俳人の両面を持つその活動の一端を『花供養』と関連付けて考察した。

4　「『花供養』と芭蕉堂」　小林　孔
『花供養』が定期的に刊行されるようになった天保以降の出版システムと、この時期に芭蕉堂が果した役割について考察した。

なお、『花供養』の画像･翻刻は、2010年11月から順次、立命館大学アート･リサーチセンターのWebサイトに公開している。

abstract

In this paper, we would like to examine some issues; “Hanakuyo-e”,which is held at Basho-do built by Takakuwa Ranko to cherish Matsuo Basho’s memory at Higashiyama in Kyoto, the annual publication called “Hanakuyo” and the historical significance of Basho’s honor in Kyoto. The followings are the summaries of our studies.

1　Basho in Kyoto –“Hanakuyo”and a stone with a Haiku of Basho.　Takeuchi Chiyoko
Basho in Kyoto is famous for “Hanakuyo” at “Basho-do”, and a stone of a Haiku of Basho, the monuments of Basho’s Haiku which were built in some sightseeing areas, are also familiar with people. Both of them were, originally, under the influences of “Shigure-e” and a grave stone of Basho. This paper examines how “Hanakuyo” and a stone with a Haiku of Basho shook them off and went through the original development in Kyoto.

2　“Hanakuyo” and Haiku circles in Kyoto　Matsumoto Setsuko
When Ranko started his activity as a master of Basho-do in the sixth year of Tenmei on Edo era, the number of Tenja and Haikaikouja are about 43. Ranko had hardly communicated with those people. This means they had differences with each other on the ideas about Haikai, audiences and the way of spreading it.

3　Publishing firm “Katsuta Zensuke”　Kishimoto Yuko
Katsuta Zensuke was not only a haiku poet, but also the publisher of Haiku books “Hanakuyo”, which had been published from the third year of Kyowa of Edo era to the ninth year of Bunka of Edo era. This paper examines such two aspects of his through “Hanakuyo.”

4　“Hanakuyo” and ”Basho-do”　Kobayashi Toru
This paper examines the system of publication after the Tempo era, when Haiku books “Hanakuyo” were regularly published, and also examines the role of Basho-do in this period.

We are opening the results on the website of Art Research Center, from November 2010.

はじめに

二〇一〇年十一月一日から二十六日まで開催した「花供養と京都の芭蕉」展は、次の七のセクションによって、近世後期における京都俳壇の中の『花供養』の位置付けが概観できるように展開させた。

(1) 東山芭蕉堂関係文書
これは、芭蕉堂の成立に関わる文書である。

(2) 洛中の俳諧師たち
ここでは、近世後期の京都俳壇を概観した。

(3) 京都の〝芭蕉さん〟
京都における芭蕉顕彰事業を芭蕉句碑からみた。

(4) 東山芭蕉堂の成立と展開
芭蕉堂の成立とその後の変遷の様相をたどった。

(5) 書冊『花供養』
全二十七冊を刊年順に概観し、表紙・袋の変遷をみた。

(6) 『花供養』の書肆
歴代書肆の代表的な刊行本を並べた。

(7) 歴代芭蕉堂堂主の俳諧活動
闌更・蒼虬・九起・公成らと『花供養』に入集している俳人の地域分布状況をみた。また、『花供養』編集・刊行にかかわる資料を中心に展示した。

右のような展示をふまえて、本稿では、二〇一〇年十一月二十日に開催した「花供養と京都の芭蕉」のシンポジウムにあわせて用意した四つの視点を研究ノートとして紹介する。

京都の〝芭蕉さん〟

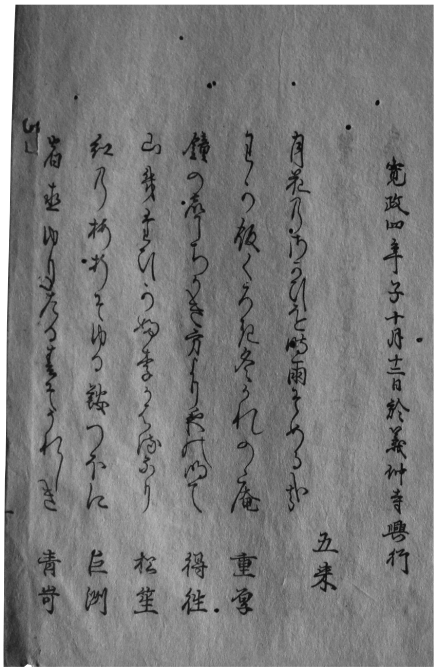
竹内千代子（聖トマス大学准教授）
E-mail taketiyo@sapientia.ac.jp

近世後期の俳諧の特徴を要約すると、〝芭蕉顕彰事業の展開〟と言える。京都では、東山の芭蕉堂が最も盛況で、〝京都の芭蕉さん〟として親しまれてきた。その芭蕉堂は、天明五（一七八五）年に建てられた。高桑闌更は、芭蕉を慕い、寛政五（一七九三）年の芭蕉百回忌を前に構えた。当時の俳壇は取越し法要が盛んで、寛政元年頃が百回忌法要のピークであった。闌更も時代の流れに従って、芭蕉顕彰の芭蕉堂を建て、森川許六刀芭蕉木像を据え、天明六年三月十二日から花供養会を催した。十二日は芭蕉の月命日である。芭蕉墓のある義仲寺で行われる時雨会は命日の十月十二日である。後発の花供養は、芭蕉の月命日である三月の桜の季節に催した。花の句を集めて供養をするという企画は当たり、多くの支持を得る芭蕉顕彰事業となった。全国の俳人が花の句を持ち寄り、〝京都の芭蕉さん〟に親しんだ。

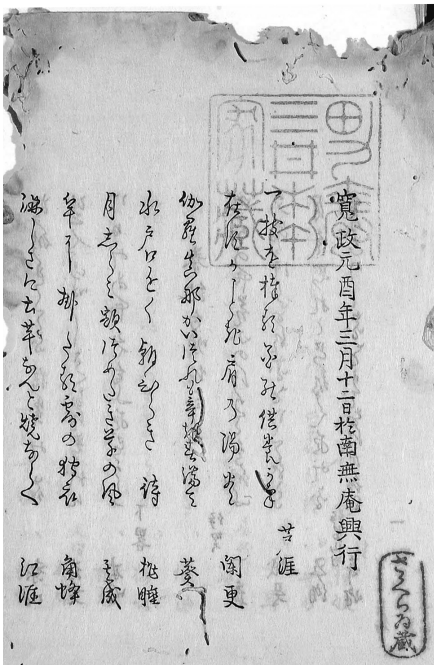
さて、花供養会を催し句集『花供養』を編む先行例は、近江の義仲寺の時雨会と撰集『時雨会』である。両会と両集とを比較検討し、『花供養』が『時雨会』を先行例としながら、独自の展開をしていく様子を考察する。

【資料Ⅰ】

○『時雨会』巻頭・寛政四年（架蔵）



○『花供養』巻頭・寛政元年（櫻井文庫）



【資料Ⅱ】『花供養』と『時雨会』比較一覧

【供養会】	時雨会	花供養会
時期	芭蕉祥月命日十月十二日	芭蕉月命日三月十二日
場所	義仲寺・翁堂	南無庵・芭蕉堂
行事内容	墓参供養・俳諧興行	供養・俳諧興行
記念集	『時雨会』を原則年刊	『花供養』を原則年刊
【撰集】		
撰集構成 ※資料Ⅰ参照	連句興行・奉納発句	連句興行・奉納発句
撰集発句	時雨の句（冬の句）	花の句（四季の句もある）
入集者	地方の蕉門の常連が下支えする	師弟に拘らない加入が多い
入集地域	全国・地方の蕉門がいる地域	全国・都市部や西日本が多い
表紙	茶、無地	茶・青など、空摺模様など
題簽	・芭蕉七十回忌粟津吟（宝暦十三年） ・しくれ会（明和元年以降寛政七年） ・時雨会（寛政八年以降）	花供養（文字は八種類）
丁数	6～44（寛政五年除）平均約19 （寛政五年の奉扇会・時雨会を含む 『祖翁百回忌』は半紙本10冊）	10～109 平均約47
撰集冊	64冊（64年分）	54冊（54年分）
撰集発行年	宝暦十三年～天保五年（71年間）	天明六年～明治二年（83年間）

資料Ⅰからは、『時雨会』の紙面作りに倣った『花供養』の編集が指摘できる。また、資料Ⅱの比較対照からは、時雨会に倣って花供養が展開している様子が推察される。一方では、入句方針の違いから、刊行期間のより長い『時雨会』の丁数は平均約十九丁。『花供養』は、平均約四十七丁と、その差が鮮明に出ている（網掛部分）。このように、花供養は時雨会を先例として出発するが、時雨会終刊後、明治期まで展開していく（網掛部分）。その要因は、花供養会が、陽気な三月に開催されたこと、多くの人々に好まれる花の句を中心に詠まれたこと、撰集の表紙が色や模様などの様々な意匠を凝らして自在な印象があったことなどが考えられる。また、近世後期に増加する俳人の多くが、師弟関係に拘らない娯楽性を求めた結果でもあると推察される。

次に、芭蕉句碑の建立のことがある。芭蕉の墓が、芭蕉の遺言により近江の義仲寺にあることは、よく知られている。生国の伊賀上野の愛染院は松尾家の菩提寺であるが、遺髪を納める故郷塚である。その他にも芭蕉を供養する碑は、全国各地にあるが、後には芭蕉の句を刻む記念碑（芭蕉行脚の記念碑ではない）としての性格が強くなる。義仲寺では、芭蕉塚を収録する『諸国翁墳記』を刊行した。京都では、上京五劫院の翁塚、同阿弥陀寺の米塚、同御霊神社の半日塚、東山双林寺の仮名碑、鞍馬の文塚、丹後宮津の一声塚（一夢塚として掲載）、同田辺（舞鶴）の烏塚が掲載されている。これらは寛政期までのもので、京都の芭蕉碑は、義仲寺の動きとは別に展開していった。すなわち、近世京都においては、現上京、東山、左京、右京の洛外（9箇所）に集中し、洛中（1箇所）や南山城地域（2箇所）には少ない。これは郊外の観光名所めぐりと関連していると推測されるのである。

さらに、俳諧は地域や身分を越えて同座するという特質が言われる。京都では、公卿が俳諧に関わることが特徴である。また、武士との交流もありその一例として、化政期以降の淀藩では、淀城内に藩士による俳壇が形成されており、点印を持つ宗匠格の藩士富原支雪がいた。畑家文書（長岡京市）には、淀藩士である畑数馬吟風の俳諧資料があり、淀藩の俳諧の実情を知ることができる。この資料から、淀城内には芭蕉の木像を祭ることもあり、芭蕉が敬慕されていたことが知られる。この期の淀藩士たちは、西村定雅・朝陽の俳仙堂や蒼虬・朝陽以降の芭蕉堂に交わっている。

〝京都の芭蕉さん〟は、京都の地と時代の要請に応えて変容しつつ、娯楽性の強い芭蕉堂と花供養会、郊外散策めぐりとしての芭蕉庵や芭蕉句碑を軸に展開し続けている。ただ、近年は、芭蕉堂の門戸が閉ざされている。芭蕉堂は、手厚く守られているが、常は無住である。この度、特別のご好意により、芭蕉木像を展示のためにお借りし、芭蕉堂の門を開けていただいた。今回の企画展示をきっかけとして、京都の芭蕉が健在であり続けることを願うものである。

花供養と京都俳壇

松本　節子（元福井大学・教授）
E-mail　setsumatsumoto@yahoo.co.jp

天明六年（一七八六）に、花供養会を東山双林寺境内の南無庵・芭蕉堂で始めた高桑闌更とその頃の京都の俳壇の様子を考えてみたい。

高桑闌更は加賀金沢の人。三十五歳頃から俳諧活動に積極的になり、四十三歳で金沢の浅野川畔で二夜庵を結び、俳論書『有の儘』を発行した。しかし、四十五歳で江戸へ。江戸でも二夜庵を結び、宗匠として十年近く滞在というのか、居住したというのか在江戸時代を過した。その後、天明初年頃の五十四歳頃に上京する。最初は「市中に居をしめられしが、名利のさはりもあればと、東山にかくれ」（半化坊発句集　序　天明六年　伊勢の嶋水）[1]住む。天明四年（一七八四）に東山の双林寺境内に借地をして南無庵を建て（後には買い取る）、六年には芭蕉堂を建て、以後毎年、花供養会を行い、『花供養』誌を発行する。このような闌更と、当時の京都の俳壇の人々との関係はどうだったのだろうか。

京都の点者・俳諧功者の名を挙げた書に、明和七年（一七七〇）に『誹諧家譜拾遺集』[2]が、寛政三年序九年（一七九七）に『誹諧家譜後拾遺』[3]が発行されている。共に貞門・蕉門に関わらず京都に在住する人たちを載せている。明和版には、貞門系四十四人、蕉門系二十七人の七十一人が、寛政版には貞門系三十三人、蕉門系十九人の五十二人が載せられている。どちらも闌更が花供養会をはじめた天明六年には年月の開きがあるが、それぞれ記載の人物の没年・点業をやめる年月等を調べると、見当がつく。両書ともに、貞門系の柳十口による編集のため、貞門系に記述が偏る恐れがないこともないが、例えば蕪村の場合、明和版において、「当春点列ニ加エラレシ由、未ダ告来タラズト雖モ、風聞ニ任テ、之ヲ記ス」と記す。二世夜半亭の几董は、両書に載らない。几董が夜半亭を継いだのが天明五年（一七八五）であり、没したのが寛政元年（一七八九）のためであろう。寛政版時には闌更は京都で活動中であるが載らない。京都に在住し、俳諧活動していた人物は他にも多いが、点者あるいは功者として京都で認められていた人物を纂輯した両書に載る人物は京都俳壇の人々と考えてよいと思う。以下に各版に載る人物で、天明六年に宗匠として認められていた人物名を挙げる。

明和版　正木鵜江（其角系）、長谷川五口（貞室系）、柳十口（貞室系）、小谷賈友（其角系）、三宅嘯山（其角系）、和田テイキ（貞徳系）、永田麦里（貞徳系）、岡田文誰（其角系）、早川来之（其角系）、堀木柳坡（其角系）　計十人

寛政版　安井為角（貞徳系）、木村一鳳（其角系）、大野魚千里（貞徳系、非点者）、安藤右夸（貞徳系）、長谷川雨柳（貞徳系）、中村佳山（二世、貞徳系）、佐々木関空（其角系）、福田寄石（貞徳系）、人見幾風（貞徳系）、中西牛行（其角系）、山田吟石（貞徳系）、林慶士（貞徳系）、月峰（其角系）、居初乾峰（三世、貞徳系）、八木五株（二世、貞徳系）、高谷九重（貞徳系）、井上五仙（其角系）、奥野佐牛（貞徳系）、四時堂志諺（其角系）、長谷川士口（貞室系）、柳生城之（貞徳系）、早川丈士（貞徳系）、中井仙雅（其角系）、戸川仙之（其角系）、黒瀬黛山（貞徳系）、高城都雀（其角系）、入江斗雪（其

角系）、三宅如洋（其角系）、森坡堂（其角系）、藤村百秀（貞徳系）、中林文虎（其角系）、西村呂蛤（其角系）、神沢杜口（其角系）　計三十三人

明和版・寛政版を合せると四十三人（貞門系二十二人、蕉門系二十一人）。

天明八年より少し前に京都で書かれた随筆に、次のような行がある。

後年に至ては、美濃俳諧加賀俳諧、洛に入込て、専ら蕉門の風行はる。是は正風を宗としてすらりと唯事を述る風俗也。是も過るは邪路也。彼徒は、己が党を結びて他と交る事なく、貞徳は下手なりなど、罵り、世の俳諧は雑誹と嘲る、其心狼戻にして甚陋し。

京都町奉行の与力で俳諧の撰集もある神沢杜口の随筆『翁草』[4]巻百五「享保年間洛俳諧の噂」中の記事である。当記事は『異本翁草』[5]巻七十八の「誹人雑話」中でも記述されている。美濃・加賀から京にやってきた俳人たちが蕉風を風として詠んでいるが、行過ぎていてよくない。また、自分たちだけで党を組み、他と交わらない、と非難しているのである。「美濃俳諧」は支考が始めた美濃派のことを指し、「加賀誹諧」は、天明元年に京都に来て、六年に「花供養会」を催し、『花供養』を出版した闌更のことを指していよう。

天明六年当時、点者・功者と認められていた人々と京都に新しくやってきた闌更との間には、神沢杜口の記述・寛政版での闌更名の不記載、そして闌更が『花供養』とは別に編纂した芭蕉堂『奉納集』の入集者を見てみると、両者の間にはずいぶん距離があるようだ。寛政元年の『奉納集』では、二柳（大坂）・青蘿（加古川）・仏仙（加賀小松）・暁台（名古屋）などの他地域の有名俳人が並ぶ。一方、京俳人は、几董と、明和・寛政版に出る人物は月峰・四時堂志諺・高城都雀の三人で他には見当たらない。他に蝶夢・重厚・甫尺・定雅、蕪村の弟子であった紫暁などの名が見える。月峰は双林寺の僧で画家。闌更が京都に来て、「市中に居をしめられしが、名利のさはりもあればと、東山にかくれ」（半化坊発句集序）住む援助をしたのが月峰であろう。志諺は円山の正阿弥亭主人、都雀は本願寺の家臣で祇園下河原に居住する。

几董は、「これやこの杜子美をかなに桜人」の句を詠んでいる。これがまあ、あの評判の桜木で造った彫像か、まるで杜甫が詩を仮名で詠んだような句をお作りになった芭蕉翁の。「これやこの」により実際にお参りして詠んだものである。寛政元年の花供養会に招かれて臨席して詠んだものであろう。几董は同年十月に亡くなっているので、以後の『奉納集』にはもちろん出句はない。

闌更は、明和版・寛政版に載る俳人たちと、交渉があったようには見えない。しかし、蕪村門の几董・紫暁・寺村百池の句が『奉納集』『花供養』に出る。百池は几董亡き後の寛政二年からは、毎年花供養会の連句出会者として名が出、闌更一門に入ったと思われる。また、蕪村の弟子であった月居がしばしば『花供養』に出句する。

蕪村門の人たちがなぜ闌更・芭蕉堂と交渉を持つのか。それは、俳諧の理念の近さがあるからである。田中道雄氏は、

几董は、旧来の都市系俳諧については「工夫」を、蕉門については「姿」があることを認めた。一方は知的な技巧であり、一方は、視覚的形象性をさす。それに対して、蕪村一派には、この二つはもちろん備え、さらにその上に「句者の精神」と「余情」を合わせ持つ、と自負する。（「安永天明期俳諧と蕉風復興運動」[6]）

と述べられる。すなわち、蕪村一派は、蕉門とも貞門とも俳諧理念が一部分ずつ重なり合うのである。両派と付き合ってゆける理念を持っているのである。蕪村が長く在住した関東から京都に来て、もちろん京都に根を下ろす几董がいたからではあるが、宗匠としてやってゆけたのは、この点が大きな要因だと思われる。

『花供養』は全国規模の俳誌である。掲載料を取って句を募集し、掲載するのである。一門の俳誌ではない。そこには、蕪村が一門の門人に出した

書簡にみられるような俳諧の教え・添削などは見られない。闌更にも一門とする門人たちはいた。しかし、『花供養』で意図したところは、旧来の一門意識ではない。俳諧の内容に関する双方向の関わり方ではないのである。闌更が対象とする人たちは、旧来の範疇に入らないのである。

対象とする人たちが、全国区なので、俳諧の広め方も異なる。そこには、旧来の俳諧宗匠たちが役目だと考えていた「秀句」という考え方は伺うべくもないのではないか。これは俳諧が堕落したとか、そういうことを言うつもりはない。闌更が考えた対象の人々・俳諧の広め方をみると、文芸としての俳諧に史的変革を与えたと考えるのである。

神沢杜口の記述「彼徒は、己が党を結びて他と交る事なく」は、闌更の行動の一面の事実を述べていよう。しかし、闌更はそんなことは意に介さなかったのである。『花供養』を閲すると杜口の述べるように「すらりと唯事をのべ」た発句がほとんどである。俳諧に対する理念の相違が、お互いに理解できないところにあったと考えられる。

〔注釈〕

（1）古典俳文学体系13
（2）俳書大系31
（3）俳書大系31
（4）日本随筆大成第三期22
（5）京都大学付属図書館蔵
（6）新日本古典文学大系　天明俳諧集　「解説」から

花供養の書肆　勝田善助

岸本　悠子（立命館大学大学院博士課程）
E-mail　lt014045@ed.ritsumei.ac.jp

『花供養』は、天明期から幕末にかけて約百年の間、刊行され続けている。その間、版元は、菊舎太兵衛、勝田喜右衛門、勝田善助、菊舎平兵衛、近江屋利助と移り変わる。

今回取り上げる勝田善助は享和三（一八〇三）年から文化九（一八一二）年ごろまで『花供養』の出版に携わった書肆である。『改訂増補近世書林板元総覧』（日本書誌学大系76　井上隆明　青裳堂書店　平成十年）には「河内屋善助　橘栄堂　勝田氏　京烏丸下立売」とある。寛政六（一七九四）年ごろから文政十二（一八二九）年ごろまで、俳書を中心に出版し、前掲住所のほか、寛政九年以前には「冨小路二条上ル丁」の住所も確認できる。

また、取次所としての機能も持っていたらしく、文化五年刊車大の『四季禽獣生自物』（松宇文庫蔵本）の刊記には「句寄取次　烏丸下立売上　書林勝田善介」とあり、取り次ぎを行っていたことがわかる。この他、文化十年刊茂良の『常盤樹』の刊記にも「御文通取次所」とみえることからも俳書編纂システムの一端を担っていたと考えられるだろう。

橘栄と号して俳諧も嗜んでおり、文化十年刊『万家人名録』にも「勝田氏橘栄堂俗称河内屋善助蕉門俳諧書林京都烏丸下立売住」とある。このような書肆・俳人の両面を持つ勝田善助の活動の一端を『花供養』と関連付けて考えたい。

勝田善助に着目した先行研究としては大西紀夫氏の「俳諧書林勝田善助の出版活動と俳人橘栄堂」(『富山短期大学紀要』三十七巻　平成十四年三月)が挙げられる。大西氏は勝田善助が出版した俳書は金沢の俳書が多いことを指摘され、六十六点の作品からこのことを検証された。

このような先行研究をうけ、あらためて調査したところ、約百点の作品が確認できたので、勝田善助の出版活動史を展望するとともに、出版の形態についても言及していきたい。

まず、勝田善助の出版活動について年次を追って確認していこう。

最も早い時期に確認できる作品は寛政六年刊呂蛤の『雁風呂』である。この作品の刊記には「平安書肆橘仙堂橘栄堂梓」とあり、橘仙堂平野屋善兵衛との相版である。ここでは「平安書肆」として出版に携わっている。

寛政六年以後、寛政十一年まで一年に一冊または二冊ほど単独で出版している。

享和三年には『花供養』も含め、五点の作品が確認できる。『花供養』の刊記では「京都書林」とあり、勝田喜右衛門との相版である。

享和三年から文化の初期にかけて、勝田喜右衛門との相版による出版物が十二点ほど確認でき、それらにおいては「京都書林」と名乗っている。勝田喜右衛門との相版については後述する。

文化期に入ると出版物の数が増え、一年に平均五点ほどの作品を手掛けている。文化四年刊、単独出版の『花供養』においては「芭蕉堂書林」と名のっており、同年刊『八重山吹』では「俳諧書林」、文化五年刊『四季禽獣生自物』では「京都俳諧書林」とあり、「俳諧書林」として活動するようになる。以後、文政期まで勝田善助の出版物の多くの刊記には「俳諧書林」と確認できる。文化四年ごろを過ぎると「俳諧書林」として活動しているのみでなく、相版もほとんど確認できなくなり、享和期から文化期の間は書肆勝田善助にとって一つの転換期であったといえる。

文政期になると、出版物の数が減り、文政十二年刊眉山の『なゝしもき』を最後に成立年が明確にわかる作品はなくなる。

以上、勝田善助の出版の流れを確認してきた。ここで特に注目したいのが、前述した享和期から文化期にかけてみえる勝田喜右衛門との相版形態である。

勝田喜右衛門は『花供養』を勝田善助に先駆けて出版しており、寛政十一年から文化二年にかけて担当している。『改定増補近世書林板元総覧』によれば、「勝田喜右衛門　桃林堂　京御幸町錦小路上ル」とあり、最も早い時期の出版物として寛政十一年刊の『花供養』が挙がっている。寛政六年にすでに出版物が確認できる勝田善助よりは遅い出版活動の開始であると考えられる。前述「御幸町錦小路上ル」の他、「四条通河原町西入」、「木屋町松原上ル三丁目」の住所が確認できる。また、勝田喜右衛門は、芦涯と号して俳諧活動をおこなっている。

『花供養』においては、勝田善助は勝田喜右衛門から引き継ぐ形で出版をはじめる。寛政十一年から以後、享和二年まで四年間、勝田喜右衛門が単独で出版、享和三年から文化二年までは勝田喜右衛門・勝田善助相版、文化三年から以後、文化九年まで勝田善助が単独出版を行っている。このように『花供養』では、相版の時期を経て書肆が移行していることが確認でき、その密接な関係が看取できるが、このような傾向を持つ俳書は『花供養』のみではない。

【表一】に示したように、甘谷の春帖『苗しろ』や、車大の春帖『くさ摘』にも、享和三年から文化期にかけて勝田喜右衛門から勝田善助への移行が

ほぼ同時期に確認できる。

【表二】勝田喜右衛門から勝田善助への変遷

	『花供養』	『苗しろ』	『くさ摘』
享和元	喜		
享和二	喜		
享和三	喜・善	喜	喜
文化元	喜・善	喜・善	
文化二	喜・善	喜・善	
文化三	善		善

＊表中の「喜」は勝田喜右衛門の出版、「善」は勝田善助の出版を示す。
＊『改訂版　加能俳諧史』（大河良一　清文堂出版　昭和四十九年）および諸文庫の目録をもとにこの表は作成した。

この時期の勝田善助の他の出版物は、『つり竿』（文化元年刊）、『南無秋の夜』（文化二年刊）、『四季類題まちりさき』（文化二年刊）などが挙げられるが、これら三作品が勝田喜右衛門との相版となっているように、相板の作品が多くみられる。特に、『四季類題まちりさき』は相版本と勝田善助の単独出版本の二種が確認できる。

以上より、『花供養』を中心としたこの時期の書物は善助にとって、勝田喜右衛門と相版することによってその業績を引き継ぐ時期であり、ほぼすべての作品が相版の形をとっている。さらに、勝田善助は享和三年に喜右衛門と相版を始めるまで、「橘栄堂　善助」の名が見えるのみで、「勝田」とは記載されないことも含めて、喜右衛門との関係は見逃せない。

刊記の記載からこの時期は、善助にとって京都書林から俳諧書林への移行時期であったともいえ、以後、勝田喜右衛門との相版は行われず、他の書肆との相版も極めて稀となる。勝田善助は基本的に単独で俳書を出版するようになるのである。『花供養』における書肆移行の現象も「俳諧書林勝田善助」への成長過程の一側面であった。

次に俳人橘栄と俳人芦涯との関係について考えてみよう。

勝田善助と勝田喜右衛門は出版において非常に近い関係にあり、また、その関係が勝田善助の書肆としての活動に大きく影響したことはすでに検討したが、次に俳人としての二人の関係について考えてみたい。

勝田善助と勝田喜右衛門はそれぞれ、「橘栄」、「芦涯」という俳号を持っている。『花供養』について二人の作品を調査すると【表二】のようになる。

芦涯は自らが出版に携わる寛政十一年より前から『花供養』にその句が入集しており、寛政元年には巻頭の発句を担当し、寛政三年には跋文も書いていることから、『花供養』において俳人として重用されていたとみてよい。以後、芦涯の句は文化十四年まで断続的に入集している。『花供養』中では芦涯の肩書は「洛」と記されており、京の俳人の一人として挙げられている。このような芦涯の俳諧活動は「芭蕉堂門人録」（常光庵蔵）より芭蕉堂一世闌更の門人であったことが確認できることからも裏付けられる。

他方、橘栄は自らが出版に携わり始めた享和三年に初めてその句が確認でき、以後、自らが出版に関わった年に一句入集するかしないかである。芦涯が自ら出版に関わる前後にも作品が確認できるのに対して、橘栄が自ら出版したものにおいてのみ作品が確認できることは対照的である。また、肩書に関しても、橘栄は文化六年の『花供養』においてその肩書が「書林」とあり、これも、芦涯は「書林」であることが明記されなかったことと好対照をなしている。

この「書林　橘栄」として自らの出版物の中にその句を掲載する姿勢は、寛政九年刊『はるの吟』、寛政十年刊『こそのしほり』等、享和三年以前の

作品からも確認できる。ただし、橘栄の句が入集する際には必ずしも「橘栄」とされているわけではないことも注意しておかねばならない。

例えば、文化二年刊『四季類題まちりさき』では「京　橘栄堂」、文化・文政期の『萩すゝき』では「書林　善助」として句を載せている。このような俳号のゆれからも橘栄が俳人としての地位を高めるためではなく、書林としてその句を載せていることがわかる。

芦涯があくまでも俳人であり、その一方で出版活動も手掛けているのに対して、橘栄はあくまでも書林であり、その成長のために俳諧活動を行っていたのではないだろうか。

文化四年刊の『花供養』に芦涯と橘栄の句が並んで配置されることからも二人の間には俳人として交流があったと思われる。

このような俳人としての交流も契機となって、享和から文化期にかけて書肆として喜右衛門の出版活動を善助が引き継ぐ形態を生み出し、さらに、このことが、先にも述べたように、勝田善助が俳諧書林として成長する一つの要素であったと考えられるのである。

【表二】『花供養』中の芦涯と橘栄の入集句数

出版年	版元	芦涯	橘栄
寛政元	菊	1	0
寛政二	菊	0	0
寛政三	菊	2	0
寛政四	菊	2	0
寛政五	菊	2	0
寛政六	菊	2	0
寛政七	芭	2	0
寛政八	芭	2	0
寛政九	芭	2	0
寛政十	芭	2	0
寛政十一	芭・喜	2	0
享和元	喜	2	0
享和二	喜	2	0
享和三	喜・善	2	1
文化元	喜・善	2	0
文化二	喜・善	2	1
文化三	善	2	1
文化四	善	2	1
文化六	善	1	1
文化九	善	1	0
文化十三	菊	1	0

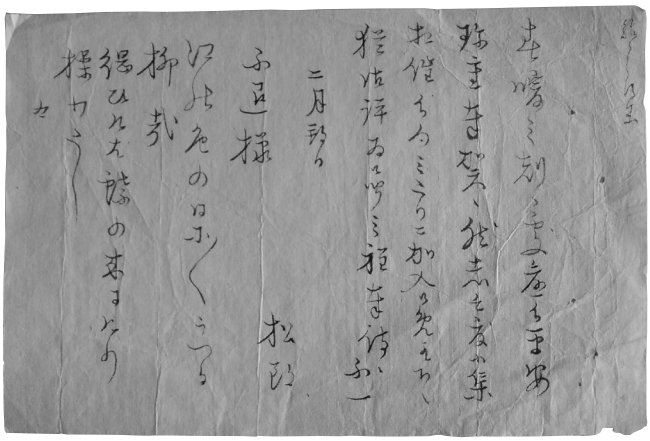
＊表は『花供養』の出版年ごとの芦涯と橘栄の句の入集数を示している。版元の略称のうち、「喜」、「善」は【表一】に同じ。「菊」は菊舎太兵衛を示す。

『花供養』と芭蕉堂

小林　孔（大阪城南女子短期大学・教授）
E-mail　koba@jonan.ac.jp

ここに短い手紙（架蔵・【図版】【翻刻】参照）を引用しよう。内容は、これから出版を予定している『旅がらす集』に、発句を加入した事後の許可願いである。これに近作の二句を記し、二月一日付で不退へ送っている。本文わずか四行の何の変哲もない文面であるが、松朗撰『旅がらす集』（文久二〔一八六二〕年刊）とつき合わせて検討すると、俳諧史のうえでも興味深い問題点が浮かび上がってくる。

【図版】



【翻刻】

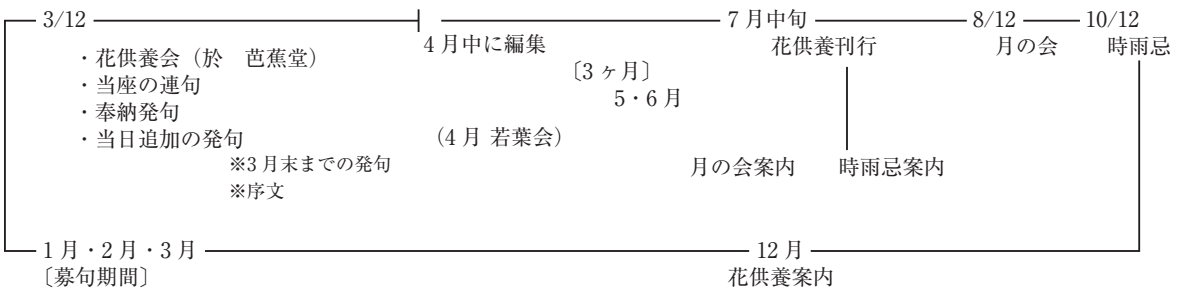
旅がらす集
春暖之刻候處愈御平安
珍重奉賀候然者今度小集
相催御句みだりに加入御免可被下候
猶御評為御聞之程奉待候
不一
二月朔日
松朗
不退様
江の色の日に〳〵うつる
柳哉
綱ひけば蝶の来にけり
操わたし
右

まず、『旅がらす集』の簡単な書誌を書き留めておく。半紙本（縦二二・三糎×横一七・一糎）一冊、袋綴。題簽は左肩に「旅からす集」、全二十六丁。「文久壬戌初春」松朗自序。最終丁近くの二十五丁裏に「真青な舟竿おくや雪のうへ　不退」の一句が掲載されている。

問題は二つある。一つは、文中に「御句みだりに加入御免可被下候」とあるように、文久二年初春一月の時点で自序を草し、おそらく編集終了後の二月一日に、無断で発句を加入した事後の報告を行った点にある。不退は佐藤氏、梅間門の名古屋の人である。明治二十八年二月に七十九歳で歿している。松朗とは旧知の間柄であったのだろう。所報の近作の中から一句を選んで自撰の集に加入したのである。つまり、俳書への入集に関しては、書面を交換する間柄であれば、受け取った後の処理は比較的自由に裁量されたということである。言い換えれば、右の手紙の松朗の二句も、たとえば不退が句集を編む際、わざわざ事前に許可を得る必要はないのである。俳人の手紙でしばしば目にする末尾の発句には、ひとつにこのような暗黙の了解が備わっていたのであった。

ただ、以上は、松朗の広い交流によってもたらされた句集編纂の模様を想像してみたわけであるが、それでは、このような交流に乏しい俳人が仮に句集（一枚摺でもよい）を企画することは、やはり当時としては果せぬ

【図】



▲①　雅琴編『半百賀』の募句チラシによれば、発句は芭蕉堂が取次。

▲②　松聲の一枚摺加入の発句は芭蕉堂公成が支援

夢物語だったのであろうか。この点は後にふれることにしよう。

二つ目の問題は、自らの序文が書きあがった「文久壬戌初春」を『旅がらす集』の編集が整った時点（おそらく一月の末であろう）と考え、二月一日付の手紙で報じている「今度小集相催」の文言がもつ出版時期が何時なのかということである。すなわちこの期間が、二十六丁の俳書が集冊になるまでに要する時間となるわけである。もちろん序文を整えて清書稿を入れ、急ぎ書面を出したのであろう。集冊となる時期も、それならばさほど遠い先のことではない。

では、芭蕉堂の年刊句集『花供養』はどのような過程を経て何月頃に出版されるのか。紙幅の関係で証左となる資料を割愛せざるを得ないが、『花供養』が定期的に刊行されるようになった天保以降を想定してそれを図示してみよう（【図】参照）。図中▲印①の募句チラシ（西条市立小松温芳図書館蔵・『静佳文音句帖』所収・弘化四〔一八四七〕年刊　松廼舎雅琴撰『半百賀』への募句摺物）によれば、年末までに花供養会への参加申込書ともいうべき「はせを堂花供養御返書」が全国の俳人に通知されるらしい。その年の参加の有無にも関わるのであろう。「返書」を出してから三月十二日の供養会までに施主料を添えて『花供養』への加入句を短冊（裏面には住所、実名を入れる）などに認めて送るのである。届先を書林菊屋平兵衛方とするチラシ（舞鶴市郷土資料館蔵・「丹後俳人の摺物注文書翰貼込帖」所収・天保四年『花供養』チラシ）もある。これが供養会までに到着するいわば奉納句で、これに当日の奉納連句、発句、そして三月末（四月の若葉会を追加するものもある）までに到来の句に序文を整えて、四月の中頃には編集、版下書ができあがるのであろう。先に見た松朗撰『旅がらす集』の二月一日の時点に重ね合わせてもよい。

問題は、この『花供養』が配本となる時期であるが、これには七月とするチラシが存在するなど、おおむね三ヵ月を要していたことが分かる。俳

書の摺りあがりと製本までにかかる時間の目安が、丁数の多寡によって期間の長短が想定されるものの、三ヵ月内外におさまりうる可能性が見えてくる。『旅がらす集』の場合も同様であろう。年どしのことゆえ、刊行までに多少の差異はあろうが、七月の上梓には月の会での配本や時雨忌の案内を挟みこむなど、【図】に示した芭蕉堂の年間行事が、日を刻むごとく大きな誤差もなく計画されていたからなのである。そのような実態をもってこそ多くの俳人の信奉を集め、芭蕉堂は組織化されてゆくのである。

では、その一斑を再び先の俳書への発句加入の問題にもどして考えてみよう。自作の発句が書冊に載る喜びはさることながら、ときに自らが俳書や一枚摺を企画し、上梓に及びたいと願う俳人も多くいたはずである。しかし、先にも想定したように、広い俳交をもたぬ者もいたわけであり、その場合、実際に芭蕉堂が俳人の句の取次をしたり、募集の広告をひきうけたり、一枚摺に加入する発句を堂主の名で募集することまであった（【図】の▲②・舞鶴市郷土資料館蔵・「丹後俳人の摺物注文書翰貼込帖」所収・慶応元年芭蕉堂公成の摺物）。なお、【図】の▲①の伊勢の雅琴が五十歳の賀集を企画した折にも、全国に募った発句の仲介、取次を芭蕉堂が行っている。

つまり、まったくの顔見知り、旧知の間柄でもない者が、多数同じ俳書や一枚摺の中で名を連ねるといった現象が茶飯の出来事として起こりうるのであった。もちろんこれが端緒となって、その後の交流が生まれた場合もあったであろうから、その意味でも、芭蕉堂は全国的な文音、交流網の中心的存在であったわけである。おそらくその背景には、篤実な俳人たちの、芭蕉堂宗匠への数知れぬ文音（例の句入書簡）があったに相違ない。近作を芭蕉堂に報じ、芭蕉堂ではそれを年ごとの「句留」として残す（架蔵に嘉永五年十一月の〔芭蕉堂発句留〕、小口に「三」と記す半紙本一冊の零本がある）。あるものは翌年の『花供養』に入れられ、またあるものは別の俳書に加入される。

いささかの自負をもって報じた近作が、やがて思いもかけず俳書や一枚摺となって飛来する。そのような驚きが、俳諧史の中では幾度となくくり返されていたのである。

おわりに

以上、本稿は、京都東山の芭蕉堂とそこで催された花供養会、句集『花供養』をめぐる芭蕉顕彰の史的意義を研究したものである。

今後は、花供養会のさらなる実態の解明、初代芭蕉堂闌更の人とその俳諧理念、書肆の俳諧活動、及び芭蕉堂の史的役割についても研究を進めていかねばならない。

なお、『花供養』の画像・翻刻は、二〇一〇年十一月から順次、立命館大学アート・リサーチセンターのWebサイトhttp://www.dh-jac.net/dbl/books/に公開している。